

IZANAGI

9

september 2016

俳優、池松壮亮、

美容師役を演じる

こんなにも深い職業だなんて。美容師という仕事の原点にハッとさせられる。ねじれゆく男と女のサスペンスを背景に、誰もが奥底に抱える人間の孤独をやさしく解放する、美容師とお客の魂の共鳴の物語、映画『だれかの木琴』。公開に先立ち、池松壮亮さんと美容技術指導の三宅正哲（東京・代官山 salon）さんとの対談をお送りします。

いま、そこにある煌めき。

モードは、いつだって、ちよつと不思議、

女ごころは、どこか妖しくて、なぜか誘惑的。

そんな魅力を散りばめた、モードヘアの数々をお届けします。

COVER /
ZENKO 堀内将男

WOMAN LOVE

by 全国美容週間実行委員会

月刊 IZANAGI 2016年9月号

25年間のアーティスト活動を経て、 ヘアラルト理事長を務める 半田まゆみさんが、次世代の 美容師さんに伝えたいことは？

2016年美容週間実行委員長を務める上田美江子さんが、テーマとして掲げた「WOMAN LOVE」。

そのテーマの通り、前回に引き続き、今回も美容業界で活躍する女性にご登場いただきます。

その女性とは、兵庫県尼崎市にあるヘアラルト阪神理容美容専門学校の理事長、半田まゆみさん。

現在の仕事に就いてからも、25年間に渡り、現代芸術家・嶋本昭三さんのアシスタントとして、アートの世界で活躍されていました。

そこで、今回は芸術やクリエイションの話から始まり、今の美容学生の傾向、

さらには、3年前に事実婚をされた半田さんのご結婚についてお話を伺います。

そして、お二人の対談を通して、女性が社会で活躍していくための秘訣を探ります。

現代芸術家、嶋本昭三に
師事した半田まゆみ

——今回のWOMAN LOVEの対談は、実は、半田さんから上田さんと対談したいというお話をいただいて実現しました。

半田 昨年、理容美容学校の研修会で上田さんのセミナーを拝見した時に、アートとか建築の話などをされていたので、いろいろもっとお話したいと思ったんです。それで、IZANAGI編集部にお願いをしました。今日は、それが叶って、とても嬉しいです。

上田 半田さんは、ヘアラルトの理事長になられる前は、アーティスト活動をされていたそうですね。

半田 そうです。理事長になってからも、25年間、現代芸術家の嶋本昭三のアシスタントをしていました。いま、軽井沢で展覧会をしているんですが、ものすごく評価が高い芸術家です。残念ながら、3年前に亡くなりましたが。

——嶋本さんの作品「女拓」に、半田さんもモデルとして登場されていましたよね。

半田 はい、私もやりました。それ以外にも、嶋本がヨーロッパの美術館やベネチアビエンナーレに招待されたりして、アシスタントとして一緒に行くことができました。そこでは、草間彌生さんやオノヨーコさんも一緒でした。

——嶋本さんは「女拓」以外に、どのような創作活動をされてきたのですか？

半田 前衛画家の吉原治良さんが、1954年に（兵庫県の）芦屋に若手アーティストたちを集めて、「具体美術協会」を結成しました。そこに参加した一人が、嶋本昭三です。その協会に参加したアーティストたちの活動が、アメリカの「アクション・ペインティング」に影響を与えました。吉原先生は、「人のマネをするな、誰もしないことをやれ」といつも若手アーティストたちを指導していたそうです。

——嶋本さんたちの活動が、どのように「アクション・ペインティング」に影響を与えたのでしょうか？

半田 嶋本たちが、禅寺にお坊さんが帯のような大きい筆で、墨絵を描くのを見た時に、その大きな筆で押さえるところとか、速く書くところとか、はねるところとか、ほとぼしりが出来たりとか……、それを見た時に、あ、これは、東洋の芸術には、スピード性や時間性が芸術に入っていると想ったらしいんです。

それを絵画に用いようということで、最初は大砲で絵を描いたり、ピン投げをしたりとかしていた。それを見たアメリカの芸術家、ジャクソン・ポロックたちも影響を受けたようです。

上田 日本の水墨画家、雪村と雪舟の絵を千葉市美術館で見た時に、書き直しが出来ないと思いました。宮本武蔵にしても、日



♡ 半田まゆみ

関西学院大学法学部卒業。美容師免許取得。現代芸術家の嶋本昭三氏と出会い師事。「髪」を現代美術として表現する初の試みで、海外の展覧会からも多数の招待を受ける。阪神淡路大震災により、前理事長である父を失う。後を継ぎ、理事長に就任。ダイナミックな発想力・行動力で理美容業界のオピニオンリーダーとして活躍。また、国内外の大学でも講義やシンポジウムを行なうなど、活躍の場を世界に広げている。そのかたわらで、学生からは気さくに「まゆみセンセー」と呼ばれ、親しまれる存在でもある。エネルギッシュな講演では、全国の人々に勇気と元気の後押しをしている。

私の人生で一番幸せなことは、
芸術家、嶋本昭三に出会えたこと。
ものの考え方や生き方、
本当に多くのことを教えてもらいました。——半田



半田さんが所有する嶋本昭三さんの作品
2008年 イタリア・カプリ島で制作

本の芸術というのは、勢いというのが、生々しくて良いですね。油絵は失敗したら、塗り直しができるそうなんですけど。

半田 失敗と言えば、嶋本の一筆の代表作は、穴の絵なんです。東京都現代美術館にも入っています。嶋本は吉原先生に1954年から師事していましたから、壁ぐらいの大きな絵を描いて大八車にのせて、一週間に一回、吉原のお宅に絵を見せに行っていたらしいんですけど、なかなか褒めてもらえなかった。戦後だから、キャンパスを買うお金がなくて、メリケン粉をたいたノリで新聞紙を貼り合わせて、絵を描いていた。ある時、絵筆でぶすつと穴を開けてしまった。「わあ、しまった!」、吉原先生のところに絵を持って行かないとあかんに、穴空いた!って思ったらいいんですけど、「まあ、ええか」って、逆にブスブス穴を空けて絵を描いて、それを持っていったら、吉原先生が初めて褒めてくれたんです。

上田 すごくいいですね。吉原先生。

半田 そう、吉原先生がすごい!「これはすごい!お前は天才や!」って、初めて褒めてくれた。それは日本では分かってくれる人がいないからと、写真を撮って海外で発表したんです。その結果、イタリアのルーチョ・フォンタナが、ナイフでスート切っている作品があるんですけど、フォンタナと嶋本のどちらかが、絵画というものに、

最初に穴をあけたのかという論争になり、嶋本の作品は、新聞紙で出来ているから年月日を見て、嶋本が世界で一番早いということになったんです。

クリエーションは、自分が丸裸になるも同然のこと

——嶋本昭三さんは、すごい方ですね。

半田 世界で初めてのことをした人なんです。25年間ずっと一緒にいましたから。最後は親子のようでした。こんなにいい関係が築けた人はいない。亡くなってからも毎日会話していますよ。

——声が聞こえるんですか?

半田 聞こえるというか分かる。何か魂が分かるっていうか。こういう時だったら、嶋本は何て言うかが分かる。しゃべり方でも。六本木の国立新美術館でも2012年に具体展があつて、2013年にはニューヨークのグッゲンハイム美術館でもありました。

上田 日本人がそこまであがいて、新しいことをやったという精神がすごいですね。嶋本昭三さんはすごい方ですね。ぜひ、軽井沢の展覧会に伺ってみたいです。でも、かつてはあまり美容業界でアートの話が出来ない人がいなかったんですよ。私の資生堂時代の師匠のマサ大竹先生は、とても美術に造詣が深い方で、そういう意味では、私も

良い師匠に恵まれたと思います。美術が好きな人のほうが、クリエーションは発展しますよね。創作するという意味では、芸術家もヘアデザイナーも同じですからね。

半田 そうなんです。上田先生の作品を見ると、単にヘアスタイルをつくっているだけでない、もっと奥深い美術のバックグラウンドとか、美術の世界に入り込んでいるのかなと思つて、いつも「ZANAGI」での作品を楽しみに拝見しています。

上田 ありがとうございます。そう言っていただけでも、ある美術教育者の先生のおかげで、今の私があるんです。日本の学校って、どちらかというと人を抑えると思つて、学校だけでなく会社という組織もそうだと思います。でも、その先生と出会ったことが、私を伸び伸びと開放してくれたんです。それがすごく良い影響を及ぼしてくれて、作品にも反映されるようになりました。

半田 すごくよく分かります。嶋本がいつも言っていたのは、幼稚園の時には、みんな歌えて、絵が描けて、踊れるのに、大人になったら、絵を描くのは苦手ですとか、人の前で歌うのは苦手です、というのは教育がそうさせていると。

上田 人と比較して自分が下手かもという認識を、学校で学びますね。あなたはダメねって。ダメじゃないのに、歌ではたま

たま音程が合わない、オンチですよ。でも、音程を合わせて弾いてくれたら歌えるんですよ。音域って人それぞれだから。

半田 ヘアラルトの教育理念は、人をキレイにする仕事を総称してヘアとしましょう。そこで自分の人生をつくっていくことが、アートなんだよということ。だから否定はしない。何でもできるよ。やってみて失敗したらいいじゃない、いつも言っています。

上田 素敵!先生によって人生が変わっちゃう。小、中、高もそうですよね。

半田 そう、変わりますね。私も一応、美容師免許を持っています。でも、サロンで働くことだけが、美容師じゃない。美容師免許をどう活かすかが大事だと思うんです。うちの学校の卒業生でも、ムービーのクリエーションをしている人がいます。ビューティが好き、という学生が、他の人が出来ない切り口を見つけて、間口を広げていけばいいと思うんです。

上田 持て余している子がいるのよね。あるいは、たまたま美容学校に来たけど、本気でいたいことが、まだ分からない子もいる。

——そうですね。美容学校に入る18歳の時、将来すべてがイメージできるわけではないですから。学生生活の中で、本気で何をやりたいのかを探すことも大切ですね。

半田 私の人生で、一番幸せなことは、嶋

本昭三に出会えたこと。絵の描き方は一回も教えてくれなかったのに、ものの考え方、生き方を教えてくれた。嶋本は新聞や雑誌の取材をよく受けていました。そんな時「半田さん、取材は質問されたことをそのまま答えるのはちゃうねんで、自分の言いたいことを答えればいいねんで」と取材の受け方まで教えてくれました。

上田 自分の意見を言えるかどうか。質問の答えではなくて、自分がどう思うか。いまだったらSNSで、人のなぞった意見を見てもつまらない。自分の感情とか、感想とか、リアルな意見が面白い。芸術もそうで、その人を感じたいんだと思う。私はセミナーなどで、受講生の皆さんに、「アートや芸術は丸裸よ」と言っているんですよ。当たっていますか?

半田 はい、当たっています。

上田 クリエーションというのは、自分が丸裸になる覚悟がないと出来ない。心のうちを見せることだから。

半田 そうですね。それが抽象画なんです。「何を描いているんですか?」と言われるけど、心の中を描いているんですよ、爆発だったとかをね。

上田 素直な自分の内面をさらけ出すこと。
半田 分かる。上田先生の作品を見ていて、すごく嬉しいと思つたことは、美容業界から芸術表現をしてきていることなんです。

今の美容学生は「脱ゆとり世代」。
将来に対しても、夢を描いている

——今、半田さんは、ヘアラルトの理事長を務められていて、最近の生徒さんの傾向をどのようにならなっていますか?

半田 今の学生には可能性を感じています。今在校している18、19歳の彼女らは脱ゆとり世代なんです。どっぷりゆとり世代ではない。ゆとり世代はどうも頑張らない。男の子も女の子も。「将来どうしたい?」と聞いても、大半が「アシスタントでいいです」と言っていた。スタイリストにもなりたがらなかつたんです。

上田 えー、うっそー!

半田 一般の会社でも、中間管理職になりたくないとか、商社に勤めているのに、海外に行きたくないとか、言つらしいんです。学生たちに「どこに就職したい?」と聞いて、「近所」。歩いていけるか、自転車で行けるか。そして、レッスンはあまりなくて、将来もアシスタントでもいい。それが、どっぷりゆとり世代の傾向だったんです。

——私も、以前28歳の美容師さんに「このままアシスタントでいいです」と聞いたことがあります。

上田 責任を持ちたくない。

半田 がむしやりに頑張りたい。ゆとり世代は、がむしやりに頑張ることがカッコ悪い。



今の美容学生は期待できる。
特に女性が意欲的です。——半田



人として自立したい女性が出てきた。
それは応援したいですね。——上田



女子トークは大いに盛り上がった

クリエイションというのは、
自分が丸裸になる覚悟が
ないと出来ないですよ。

——上田



上田 満たされているのかな。最低限は。
半田 ある意味、豊か。
——でも、社会背景としては、失われた20年の世代でもあるので、中には親がリストラされたりしている人もいますよね
半田 だから、お金を使わない。それで、ファストファッションで揃えて。それに今の若い子は車を持たないでしょ。カッコいいブランドの服を買ったりもしない。
上田 私たちが若い頃は、高いものを買ってましたね。給料安いのに。
半田 ブランドのものが欲しくて、パリに行ったりね。
上田 お金がなくても、夢を叶えるために、お金を使っていた。
——以前は、ブランドの洋服を買うために借金していたとか、そういう話をいっぱい聞くことがありましたけど、今はそういう話を聞かないですよ。
半田 それが、またちょっと変わってきたんです。脱どっぷりゆとり世代の学生たちに「将来どうしたい？」と聞いたら、「結婚しても出産しても働きたい」とか、「自分の店を持ちたい」とか言う子が、また復活。しかも、男の子よりも女の子のほうが、将来、自分の地元で、自分の思いを反映した可愛いお店をやりたいとか、地域の人に喜んでもらえるお店をやりたい、という夢を持っている学生が出てきました。
上田 ある意味、人として自立していき

上田 今日の上田さんに、プライベートなお話も聞きたいなと思っていました。結婚もされて、お嬢さんもいらして、仕事もこうして辞めないで続けてこられて、お嬢さんもお嬢さんは、誰が面倒をみていらしたんですか？
上田 結婚する時に、出張がない人、転職がない人を選びました（笑）。恋愛する以前の問題かも。独身の頃、男性と出会いがあったら、一般企業の営業の人は転職がある。だから、結婚は無理かなと初めから全然惹かれない。まず、普通のサラリーマンの方とはなかなか縁も合わなかったですが。
半田 それは私も分かります。
上田 何かしらものづくりや表現できる仕事に携わっている人のほうが、感覚的に近くていいなと思ってたんです。しかも転職がない人。そして、私が仕事をするのを、男の人は「君の好きにいいよ」、「君が好きなら仕事していいよ」という人はダメだと思ってる。それは男として無責任かも。なぜなら、応援しないかもしれないから。そうじゃなくて、「仕事をしている女性がいい」くらいでないとね。うちの夫は、それで結婚したら、現実かなり理解があつて応援してくれる人でないとあり得ませんから。
半田 上田先生は、どこで、そんなすごい支援者と出会ったんですか？
上田 若い時、20代で出会ったんですけど、CM業界にいた人なので、ヘアメイクの仕

い女性が出てきた。以前のような、男の人に負けたくない、という感じではなくて。
半田 結婚して出産しても、美容師は続けていきたいです、という声が多くなってきた。それはすごいことかなと思うんですよ。
上田 そういう女性たちは、応援したいですね。長く続けたい人のための支援をしたい。
——期待が持てますね。
半田 だけど、今の子たちの特徴は、その夢を叶えるために、何をしたらいいか、というところまでは考えていない。私たちの世代は、いいブランドのバックを買いたい、いい車に乗りたいと思つたら、じゃあ、頑張つて自分の稼ぎをよくしてとか、サロンのオーナーになって、それを叶えたいと考えるじゃないですか。そこが、今の子はつながらないんです。たとえば、学校の海外研修に行つて帰ってきた女の子に、「将来どうなりたい？」と聞いたら、「ばんばん海外に行ける美容師さんになりたいです」というのね。じゃあ、サロンに勤めていたら、ばんばん海外には行けないよ、自分がオーナーにならないと行けないよ、と言つたら、「あ、そうか」と言ってますね。それに、理解のある旦那さんじゃないと行けないよ、と言ってますね。それもまた「あ、そうか」と言う。今の、オーナークラスの人たちは、夢を叶えるために、こうやって頑張つて働こうとか、売上げを上げようとか考えてい

たと思うんですよ。
上田 基本の生活が心配じゃないからですかね。海外研修も親御さんが出してくれただらうし。
半田 若い時はアルバイトも何でもあるし、20代の時しか見ていない。30代、40代、50代の時のことも、考えてもらんよ。美容師の免許を取っていたら、また復帰も出来るよ、と言つたら、「あ、そうか」という感じ。それをつなげてあげてお手伝いを、オーナーの人たちはしてあげないといけないんですよ。
上田 うちの娘は、美容学校卒業してすぐ妊娠して結婚しました。子育てしながら専業主婦を3年、旦那さんだけには頼れないと思つたらしく、「カットもできるちゃんとした美容師になりたい」と言い出して、この4月から復帰しました。自宅に近い美容室で、子供を保育園に預けていても、雇ってくれるサロンオーナーの方と出会ったおかげです。技術の修業も、育成もしてくれろという有難い美容室で。娘が子供を持つ母親として社会的にしっかりした考え方を持つようになり、将来を考えたら、カットができない美容師は食べていけないって。
男性が「君の好きにいいよ」は無責任。結婚したら夫婦ともお互いの応援がないと、女性は仕事を続けられない
ある、と思つていた女性が、毎日の生活に困つていたら、アートどころじゃありません。作品をつくっていけない。多くのしょうもない結婚を見てきたと。私が26歳くらいの時に、「結婚しよう」と言われたと先生に話したら、「辞めとき」と言われた。「結婚はしょうもないで」と言われてね。それで、今のパートナーを断つたんです。嶋本が言うには、人間は右肩上がりに伸びていくものじゃない。伸びていないかと思つていたら、突然ボンと伸びる。また、ボンとそのボンと伸びた時に、結婚するのがええねんで。でも、人は男でも女でも、自分が弱気になっている時に結婚したがる。名言は、「結婚してから不安がなくなるわけちゃうねんで、結婚しても旦那が浮気するんちゃうか、リストラされるんちゃうんかと思つて子供ができたら、不良になったらどうしようとか、勉強が出来なかったらどうしようとか思う。人間には不安があるもんや。不安がなくなるのはな、半田さん、自分に実力をつけることやで」と20代からずっと教えてもらつていたんですよ。
上田 そう思います。私は収入がある。自分が社会に出てやることがあるというのは、やっぱり支えになります。
半田 そうですよ。私はよく学生に話をするんです。結婚したから不安がなくなるわけじゃない。「みんな考えてご覧、これだけ離婚も多い、いつ交通事故とか病気になる

仕事もしながら、自分の人生も楽しめる、
 パートナーという存在がいるほうがいいと思う。
 事実婚をして、その有難さを実感しています。 ——半田



©shimamotoLAB inc.
 嶋本昭三「無題」2009年、アクリル・ガラス片・
 カンバス、203.2×153.0cm



©shimamotoLAB inc.

嶋本昭三展

— 前衛の衝撃 —

●会期:~9月22日(木・祝) ●開館時間:10:00
 ~18:00 ●休館日:火曜日(火曜日が祝日の場
 合、翌日休館。8月無休) ●会場:軽井沢ニュー
 アートミュージアム(長野県北佐久郡軽井沢町軽
 井沢1151-5) ●入館料:一般1,500円 ●HP:
<http://knam.jp/> ☆読者プレゼント5名様



上田美江子
 (Mieko Ueda STUDIO)

1979年より35年間、長年勤務した㈱資生堂を2014年3月末に退職。2014年4月より㈱エムユー/MiekoUeda STUDIOを設立し、ビューティードイレクターとして独立。資生堂在職中は、資生堂の宣伝CMポスター、雑誌、ファッションショーなどのヘアメーク、商品開発、セミナー講師等、資生堂を代表するビューティードイレクターとして活躍。資生堂のヘアメークスクールSABFAの設立に携わり、担任、副校長として長年美容分野のプロフェッショナル人材育成に力を注ぎ数多くの日本を代表するトップヘアメークアーティストを世の中に送り出してきた。現在、JHAのプロフェッショナル審査員を務めている。

若い時にな、医者だったか、弁護士だったか、結婚しようかと言われた時もあったんや。でも、反対してやったん。でもな、それでよかったんや。半田さん見てみ、自由によって生きているやろ」と話していたんですよ。

上田 見抜かれていたんですね。今はその時期じゃないって。

半田 彼も言うんですよ。君みたいなタイプが、あの時、結婚していたら、主婦になつてしようもない人生やと言うてると思うんですよ。

上田 いろいろな経験をして、自分が食べていける収入を得られるようになって、本当の意味で自由になった。そうすると、本当の意味で、自分に合う相手を選べる、ということなんですかね。

半田 そうですね。

——今日は、アートの話から始まり、美容学生の傾向、最後には、独自の女性美容師さんたちへ、エールを贈る内容になりましたね。楽しいお話をありがとうございました。

るかもわからない。だから、免許をとって稼げるだけの実力をつけて、自分で生きられるようになったほうがいいんじゃない」と、学生たちに話しています。美容の仕事は、女性が精神的にも経済的にも自立できるから、本当に女性美容師さんには頑張ってもらいたいですね。

26歳でプロポーズされた彼との再会、長い時を経て、事実婚という形で結婚

——確かに。ところで、半田さんのお話も伺いたいですね。先程、3年前に結婚した旦那様に、26歳ぐらいの頃に「結婚しよう」と言われたとおっしゃってましたか。

上田 旦那さんは、諦められなかった人？

半田 19歳から知っている人なんですよ。彼が諦めなかった。

上田 素敵〜！愛されている(笑)。

半田 19歳で予備校が一緒だったんです。私は私立文系で、彼は国公立理系で同じ年。彼は大阪大学医学部に入って、優秀だった。昔は携帯がないから、自宅に電話かかってきて、うちの親は、「マジメでいい子なのに」と言っていたけど、ダサかった(笑)。上田さん、若い時、それがめっちゃ許せなかったんですよ。

上田 こういう仕事しているとね。いくらいい人でもね。

半田 26歳の時に、手をつないだこともな

いのに「結婚しよう」と言われた。今になって、「あの時、何で結婚しようって思ったの？」と聞いたんですよ。彼の中で、こんなに話が合う人はいない。映画や芸術の話も合うし。結婚するものと信じ切っていたからだと。その頃の私にしたら、ジャストフレンドで、突然、結婚しようかと言われたから、これからそのつもりでお付き合いしたらいいのかなと思っていたら、次に電話がかかってきた時には、結婚式はどこしようって言われて。だから、怖くなくて会わなくなったんですよ(笑)。今まで良い男女達だったのにと思ってしまう。逆に彼は人間不信になってしまった。それで、その後知り合った女性と結婚したらいいんです。その結婚生活はうまくゆかず、離婚するぐらいの時に、私と再会したんですよ。それも、すごいきっかけがあった。

——どのような？

半田 ヨシ・トーヤ先生は、私にとって嶋本昭三の次に、メンターなんですけど、神様みたいな人。ある時、先生が「半田さんは結婚したいと思ったことはないの？」と言われたんですよ。それで、昔結婚しようと言ってくれた人がいたという話をしたら、「その人はきつとまゆみさんのことを本当に好きだったと思うから、今の年齢だったら良い話相手になれるから、その人と会ってご覧なさい」とおっしゃったんですよ。彼とは年賀状だけはやり取りし続けていたので、

それで私から、年賀状に「今だったらお話できることがあるかもしれません」と書いて出したんですよ。そしたら、すぐ連絡がきて再会したんですよ。

——それがきっかけで、3年前にご結婚された。結婚パーティをされましたよね。

半田 私たちは事実婚の形をとっています。パートナー宣言というパーティを開いて、400人も集まっていたいただきました。しかも、「働く女性の憧れ」と皆さんにおっしゃっていただけたことが嬉しかったです。「私は籍を入れませぬ。半田まゆみで生きていきます」とそのパーティで発表したんですよ。

上田 大人の恋愛ね。

半田 そして、嬉しかったのは、パーティの時に、彼が自分は医師として、多くの人の命を助けてきた。でも、半田まゆみは、講演会とか学校で、もっと多くの人を元気にしている。だから、これからは仕事を続けるべきだ、と言ってくれたんですよ。さらに嬉しかったのは、パーティに出席してくれた、彼の職場の20代の医師や30代のカッブルが3組も、その後、結婚したんですよ。

上田 私たちみたいに強い女性、やりたいことがある女性が、結婚できるということ、100%受け入れてくれる男性でないと。女性にとって「いい男」と言うのは、いろいろあると思いますけどね。

半田 いい男を見つけたら、いい仕事ができる。なぜなら、応援してくれるから。だ

から、次世代へ伝えたいのは、仕事もしながら、自分の人生も楽しめる、パートナーという存在がいるほうがいいと思うんですよ。昔の結婚のスタイルにこだわらないほうがいいかなとも。

上田 いつもそばにいる、という存在は有難いですよね。恋こがれるというのは別ですね。

半田 私は、全然結婚したいと思わなかったし、型にはめられる結婚がいやだから、事実婚なんです。それでも、パートナーがいてくれる有難さとか、お互いが支え合えていると実感しています。一番の理解者ですからね。

上田 年取った時に、パートナーがいるかいないかは全然違いますよね。それが魅力的だと思う。20代の時のプロポーズから事実婚されるまで、とてもドラマチック。運命って、神様はよくしたもので。やっぱり用意されていたような気がしますね。

半田 彼と再会してから葛藤があつてね、なぜ私は26歳の時に、彼の良さを見抜けたかったのか、とすごく悔やんだんですよ。26歳の時だったら、彼の子を産めたのにつて。

上田 でも、そこで結婚しなかったから、嶋本さんにずっとついていけた。その経験は大きいですよ。

半田 嶋本も言うてました。私には言わないくせに、私の妹弟子とかに、「半田さんも